



セヴラック通信

Courrier de Séverac

第17号

2014 後期

日本セヴラック協会・会報

Société Déodat de Séverac - JAPON

第 22 回例会
2014 年 11 月 9 日(日)
衍芸館
プログラム

例会
16:00-18:10

【講演】
サンゴ礁の人々と音楽
近森 正

～休憩～

【演奏とお話】
セヴラック：《梟》の初期草稿について
末吉保雄

【演奏】
セヴラック：《梟》（詩：ボードレール）
Déodat de Séverac : Les hiboux (Charles-Pierre Baudelaire)
鎌田直純 (Bar) 末吉保雄 (Pf)

セヴラック：《ミュゼット》
Déodat de Séverac : Musette

本宮廉子 (S) 末吉保雄 (Pf)

セヴラック：《雪の時》（詩：ゴーチエ＝ヴィラルール）
Déodat de Séverac : Temps de Neige (Henri Gautier-Villars)

森田 学 (Bar) 末吉保雄 (Pf)

モンサルヴァーチェ：左手のための 3 つの作品
Xavier Montsalvatge : Tres Obras Para La Mano Izquierda

そう, モンボウヘ

Si, a MOMPOU

オスカー・エスブラの追憶に捧げる子守歌

Berceuse a la Memoria de Oscar Espla

ルビンシュタインのためのページ

Una Pagina para Rubinstein

舘野 泉 (Pf)

懇親会
18:15～

I. サンゴ礁の起源と神話伝承

- a. 環礁の島 人間の居住 (南太平洋クック諸島ブカブカ環礁)
- b. チャントが伝える神話伝承

II. 楽器

1. 割れ目太鼓 nawa
2. サメの皮太鼓 一面太鼓 matatahi 両面の太鼓 matarua
3. 石油カン tini
4. ホラ貝 pu
5. ココヤシの葉の口琴 titapu

III. 音楽形式の分類

- a. チャント
 1. マコ mako (詠唱歌) 歌のみ (宗教的なものも日常的なものもある)
 2. チラ tila (朗唱歌) 歌 (踊をとともうこともある) 日常的
 3. イメネ・ツキ imene tuki 歌のみ 宗教的 (讃美歌)
 4. パタウタウ patautau 歌+太鼓+踊 日常的
- b. 現代の音楽
 5. ウパウパ upaupa 歌+太鼓+踊
 6. ウラパウ urapau 太鼓+踊 (ドラムダンス)
 7. イメネ・ロパ imene lopa 歌+ウクレレ ギター+踊

IV. 音楽と生活

1. 音楽は季節的な活動 一年の生活のサイクルと結びついている
矢投げ Tika、槍投げ Velo の競技のチャント ポポコ相撲のチャント
魚取りの競技 ココナッツの皮剥き競争のチャント
2. 音楽は人生、ライフサイクルと結びついている
子供の生長 愛のチャント kupu 系譜のチャント wakatapaka
成果を祈る呪文のチャント 誇示するチャント tangitangi
葬儀のチャント tangi 歓迎と別れのチャント
3. 音楽は人間と超自然的な世界との結びつきをつくる

V. チャント音楽の将来

大田黒公園散策 ② ●末永理恵子	3
------------------------	---

〈連載〉セヴラックと私 ●山下大樹	7
-------------------------	---

日本セヴラック協会創立 10 周年記念特別演奏会の報告 ●鎌田和夫 ...	10
---------------------------------------	----

第 22 回例会プログラム	表 2
---------------------	-----

講演「サンゴ礁の人々と音楽」レジュメ	3
--------------------------	---

[連載]

大田黒公園散策 ②

大田黒元雄と「ピアノの夕」

末永理恵子／文

衍芸館にほど近い大田黒公園と、大田黒元雄の業績について少しご紹介してから約1年が経過し、また紅葉の季節がめぐってきた。再びスペースをいただけたので、引き続き大正期に「現代音楽」を紹介した大田黒元雄について考えてみたい。

1912（大正1）年12月に日本を離れて英国へ渡り、ロンドン大学で学んでいた大田黒は、14（大正3）年に一時帰国したが、第一次大戦の勃発によって留学が中断されてしまい、本格的な執筆活動を開始した。翌年には著書『バッハよりシェーンベルヒ』を出版して注目される。同じ年に、「ピアノの夕」という小さな演奏会を開き、文字だけでなく生演奏で新しい音楽を紹介していこうという試みも始まる。「ピアノの夕」は大森山王（現大田区）にあった大田黒の自宅で、17（大正6）年までの間、10回ほど行われた。

第1回は「ドビュッシーの夕」（15年12月18日）で、出席者は堀内敬三、菅原明朗、野村光一、二見孝平、田村寛貞など約20名。小さなプライヴェート・コンサートだが、田村寛貞（1883-1934）のような“大物”（音楽学者。当時、東京音楽学校教授であった）も聴きにきた。プログラムは、以下の通りである。

第1回「ドビュッシーの夕」

ピアノ独奏

1. グリーク「春に寄す」（堀内敬三）
2. ドビュッシー「小さな羊飼ひ」（野村光一）
3. イリンスキー「子守唄」（野村光一）

歌曲

4. フォーレ「ゆりかご」（堀内敬三）
5. ドビュッシー「ロマンス」（堀内敬三）

ピアノ独奏（以下は大田黒元雄演奏）

6. シンディング「春の囁き」
7. スクリャービン 「前奏曲」Op.11-15 レント／Op.11-16 ミステリオーズ
8. シベリウス「悲しきワルツ」
9. ドビュッシー「夢想」
10. ドビュッシー「マズルカ」
11. ドビュッシー「牧神の午後への前奏曲」（ピアノ・ソロ版）
12. ドビュッシー『版画』より「雨の庭」
13. ドビュッシー「亜麻色の髪の乙女」
14. ドビュッシー「沈める寺」

前半は仲間たちがピアノや歌を披露し、後半は大田黒が腕をふるうプログラムとなっている。堀内敬三（1897-1983）、野村光一（1895-1988）といえ、ある年代以上の方々は往年の楽壇の重鎮としてよく知られているが、ピアノや歌を人前で披露することは後年はあまりなかっただろう。今と違って情報がなかなか入らなかった時代に20歳前後だった好楽の同士たちが集まって盛り上がっていた熱気が感じられる。

当時の音楽会は、東京音楽学校に関連した演奏会と、1905（明治38）年に始まった日比谷の奏楽が中心であったようだ。堀内敬三は次のように回想している。

日比谷の奏楽が始まって、戸山学校（永井建子－山本銃三郎指揮）海軍（吉本光蔵－瀬戸口藤吉指揮）近衛師団（山本銃三郎－大内玄益指揮）の三軍楽隊が代る代る奏楽をやる。すこし遅れて三越少年音楽隊（久松鉦太郎指揮）も参加する。「ボヘミアの少女」「赤水軍」「森の鍛冶屋」「獅子の寝覚め」「波を越えて」など、云ふ曲と御馴染になったのは日比谷の草創時代。私たちがオルガンでひいたのは「コチロン」「カドリール」「ランサース」のたぐひで吉田信太編「方舞」と云ふ譜本が女学校の舞踏用にひろく使用されたもの、「ドナウ河の漣」が流行して『月は霞む春の夜』と云ふ文句を皆が歌った。

かうして私の音楽趣味はいつしか進んで上野渴望時代に入る。

上野は絶対勢力で、ユンケル、ロイター、幸田延子、安藤幸子を擁して飛ぶ鳥を落したもののだが、ユンケル去り、ロイター去つてからも、ベツオオールド、ウエルクマイスターあり、それに新進気鋭のクローン及びシヨルツが著任して至上の王国を築き、春秋二季の大演奏会には分らぬながらも世の好楽家が雲集した。学友会が根を張つて明治四十三年頃から雑誌「音楽」を出しその編輯長は牛山充、毎号新曲の附録があつてそれをまた私共大変有難がつた。土曜演奏会と云ふ上野の学生の研究発表会が毎月一回あつて音楽青年、音楽少女はそれに赴く事を名誉と心得たもの。此の時代の上野のプログラムはシューバートやシューマンの歌曲、「ゾナーテンアルバム」の中の古典派奏鳴曲類、「アリエンアルバム」の中の詠唱類が幅をきかし、コンチエルトも古典派もので持ち切つた。ヴェーバーの「ロンドブリランテ」やロツシーニの「ウナヴォチエ」などは何度聞いたか分らない。

[中略]

レコードは主として十字屋のビクター、赤盤は片面ばかりで十吋が五円、十二吋が七円。声楽物は豊富だったが高級な器楽曲は皆無に近かつた。交響曲のレコードはベートーヴェンの第五番、ハイドンの「驚愕」「ジュピター」モーツァルト「ト短調」等が省略された形で入つてゐるに過ぎなかつた。

ざつと此う云つた状態で当時の楽壇が進んで居た。私達は「日比谷」と「上野」と「ビクター」に依つて平凡な音楽に親しみ、英語の音楽書を読んで智識を補ひ、兎に角当時在つた音楽に対しては徹底的な研究を行つて居た。

——堀内敬三「音楽と文学の頃」『音楽雑誌フィルハーモニー』3巻5号（昭和4年5月号）より

東京市が主催した野外音楽堂での「公園奏楽」で、軍楽隊が活躍して娯楽的な軽い曲が多く演奏され、東京での洋楽振興がすすめられる一方で、東京音楽学校の演奏会が、ドイツの古典、イタリアの声楽曲など、軍楽隊のレパートリーとは異なる曲目をアカデミックな雰囲気の中で取り上げ、日本の洋楽界の本流と目されていたと考えられる。レコードや楽譜も日本で手に入るものが限られていた中で、大田黒が直接外国から仕入れた知識と楽譜に基づいて、第1回ピアノの夕べは開かれた。その思い出が、さきほどの引用の続きに綴られている。

で、大正四年の終頃から大田黒元雄邸のサルーンに於いて「ピアノの夕」なるものが毎月一回催はされて主人公自身がピアノに依つて新らしい楽曲を紹介した。第一回の際には前座として私がドビュッシーの「ロマンス」を歌ひ、続いて野村光一がイリンスキーの「子守唄」か何かを弾いた。其の時に田村寛貞がピアノの傍の安楽椅子の上にあぐらをかいて腕組をして聴いて居たのは物凄かつた。そのおかげで野村光一も私もひどく恐縮して結局どんな事をやつたか甚だ記憶が怪しいが後の評判から察すると大分ひどい演奏をやつたに相違ない。真打の大田黒元雄が何を弾いたかはつきり覚えて居ないが「牧神の午後」其他七八曲であつたと思ふ。

「ピアノの夕」は長く続いた。前座は一回限りで免職になつて（尤も当方からも辞退したらしかつたが）其後は大田黒元雄ひとりで奮闘して居た。でもよく弾いた。巧かつたとは云へないにしても近代楽曲の精神をよく私達に伝へて呉れた。演奏のあとで毎回茶話会が開かれて芸術談が賑はつた。当時の出席者の中には画家の大野隆徳、舞踊家石井漠、旧帝劇の歌劇歌手小森啓吉、など、云ふ顔も見えた。

また、1935（昭和10）年発行の『音楽世界』の「大田黒元雄氏を中心にした座談会―「バッハよりシエーンベルヒ」出版二十週年」と題した記事に見られる「ピアノの夕」の思い出は次の通りである。出席者は大田黒元雄、野村光一、堀内敬三、二見孝平、弘田親輔、中根宏、塩入亀輔（司会）。

中根 大森の家で近代音楽の夕といふやうなプライベートの会をやつたね。

堀内 そこへ集まつた連中が皆で一つ雑誌を出さうぢやないかといふ事になつて五十錢づゝ出して雑誌が出来たんだ。

弘田 第一回の時野村さんがピアノを弾いた。

野村 君（堀内氏）も弾いたね。グリークの「春」か何か。

塩入 何人位集つたんですか。

弘田 二、三十人だつたね。

大田黒 そんなにはない。二十人位だ。

弘田 そのまたプログラムは堂々たるもんだ。後にアメリカのプログラム・エキスチエンデに出ましたがなかなかひけを取らない、とても凝つたものでしたよ。長谷川潔の版

画入りでね。

〔中略〕

塩入 大森の演奏会は何回位やつたんです？

大田黒 十回位やつたかね。

塩入 入場料は取つたんですか。

大田黒 何にも取りやしない。

堀内 それ所か演奏が済むと鄭重なおもてなしに預るんだ。

大田黒 それがために皆が集つたんだよ。

中根 それからあそこにはずらつと書架が並んで居たね。

二見 本を見るだけでもたのしみでした。

——『音楽世界』7巻4号（昭和10年4月号）より

この茶話会あるいは「鄭重なおもてなし」で、音楽雑誌を出そうという話がもちあがり、二十数人の賛同者が1ヶ月50銭ずつ出し合って『音楽と文学』という、日本初といわれる音楽評論雑誌を創刊する。発売元は岩波書店で、1916（大正5）年3月のことである。

大田黒記念館には、第1回のプログラムのほか、数点のプログラムが展示されている。1916年1月11日には「23歳の誕生日を記念して」ということでスクリャービン、シベリウス、ファージョン（Farjeon）、シ ril ル・スコット、マクダウェルらの作品が、1月29日には「ピアノの夕 ロシア音楽プログラム」として、ボロディン、キュイ、リャードフ、パチュルスキ、イリンスキー、グリエール、スクリャービン、レビコフ、ラフマニノフといった作曲家の作品が並んでいる。2月20日はグリーグの作品、3月25日はロシアのピアノ音楽の第2回、4月29日のシベリウスの夕で、ロシア及び北欧の作品にも並々ならぬ興味が注がれていたことがわかる。このほかに展示されているプログラムを見ると、5月29日、6月24日のものがあり、最初のうちは毎月1回のペースで開催されたようだ。6月の会は印象派特集で、ドビュッシー「アラバスク第1番」、『小組曲』より「小舟にて」、「マズルカ」、『ベルガマスク組曲』より「月の光」、『子供の領分』より「ゴリウォーグのケーキウォーク」、「カノープ」、「牧神の午後への前奏曲」、フローラン・シュミット『夜』より「エグローク」「波の上で」、ルネ・バトン『ブルターニュにて』より「聖ナゼルの大噴水の上の夏の黄昏」、シ ril ル・スコット『ポエム』より「鐘」、『エジプト』より「エジプトの舟歌」が演奏されたことを記しておこう。

今年の大田黒公園のライトアップは11月28日から12月7日までとのことである。展示資料の詳細を確認することも兼ねて、再度訪れてみたい。

参考文献：日本近代音楽館編・発行『大田黒元雄とその仲間たち—『音楽と文学』の頃』（2002）

リレー連載

セヴラックと私

山下大樹

「出会い」の瞬間はどのように用意されているのだろう。

私が“séverac”という名前を初めて目にした瞬間は、どんなに遅くとも 18 歳になる直前であったはずである。改めて考えてみると、なんという昔の話であることか。その頃、リストの《ハンガリー狂詩曲》第 12 番の練習をしていて、春秋社の楽譜を使っていたのだけれど、持ち運ぶのが重たいという今にして思えば怠惰さわまりない理由から、サラベール社（いわゆるコルトー版ですね）の第 12 番だけの楽譜を手に入れたのだった。その楽譜の巻末に、「20 世紀の作品」紹介みたいなページがあり（もちろんフランス語で書いてあった）、そこにはセヴラックの《セルダーニャ》全 5 曲のそれぞれ冒頭部分の楽譜が掲載されていた。「どれどれ、どんな曲だろう」と第 1 曲〈二輪馬車で〉の最初のカデンツァ部分をピアノで音にしてみた時の感慨をいまでも覚えている。さあっと目の前の開けるような、いきなり暗いところから明るい場所へ出てきたような、それでいて、どことなく切ない感じのするような。冒頭のほんの数小節だけ記された他の 4 曲も音にしてみた。いずれも非常にチャーミングな出だしであり、こうなると続きがどうなっているのかが非常に気になった。

ところが、このセヴラックなる人物、いったいどこのどういう人なのか、全く判らない。そもそも、名前の読み方すら、当時高校生の私には判らなかった。分厚い百科事典や音楽事典の類いをひもといても、全然情報がないのである。時は昭和の末、インターネットどころか携帯電話もまだ世の中に登場していない時代である。その後、かなり捜した末に、当時サラベール社から出ていた『セヴラックピアノ作品集』という楽譜を手に入れることに成功した。かなり大ぶりの楽譜で、表紙は何の絵なのか未だ謎なままのイラストが描かれてあり、《ピアノソナタ》や《夾竹桃の下で》と遺作に分類されるいくつかの小品以外のほぼすべての作品が収録されている。余談であるが、同じ楽譜は現在でも出版されているのであるが、サイズが一まわり小さくなっていて、緑色っぽい表紙には『セヴラックピアノ作品集』とフランス語でそっけなく書かれているだけのものになっている。

楽譜の入手と前後して、ピエール・ルコントというピアニストが 4 人のフランス人作曲家の作品を録音した『フランスのピアノ曲集』という CD を入手した。これは、プーランクの《3 つの小品》が聴きたくて手に入れたのであるが、なんとセヴラック

の作品が3曲、しかも冒頭に入っているというものであった。シャブリエが2曲だけなのに対してセヴラックは3曲と、1曲多い。誰だか知らないが、このCDの企画を通したプロデューサー氏は、きっとすばらしく心がけの良い人物に違いない。

自分以外のだれかがセヴラックを演奏しているのを聴いた、これが人生初であった。そしてほとんど同時期にアルド・チッコリーニによる3枚組のCDを手に入れ、かなりしつこく聴いたものだった。もちろん現在でも聴いている。2003年になって、舘野泉先生のCD『ひまわりの海』を手に入れ、そこにセヴラックに関する詳しい記述が写真付きで掲載されており、それを見た瞬間、「この場所へ行こう」と決心した。

サン＝フェリクス・ロラゲを訪問する機会は意外に早く訪れた。それは2004年の春先で、まだ肌寒い頃だった。まずは飛行機でパリへ。一泊して翌朝、フランスの新幹線・TGVに乗ってトゥルーズへと向かった。5時間以上のかなりな長丁場であったが、パリを出た瞬間に広がった、鮮やかな自然の景色に目を奪われ、さほど苦痛にも感じなかった。

トゥルーズで乗り換えて、カステルノダリーという駅で降りる。そこでタクシーを拾って、いよいよサン＝フェリクス・ロラゲに到着である（注：現在ではもう少し楽な行き方がありますよ）。パリを出発してから8時間以上経過していた。

村の様子は、舘野先生のCDや音楽之友社の楽譜の解説に詳しく書かれているので、ここでは割愛するけれども、セヴラックの生きた時代から、きっとそれほど大きく変わってはいないのだろうな、と思わせる。

そろそろ夕暮れの迫る刻限である。とにもかくにも、まずはセヴラックの墓所にお参りしよう、と決めて、閉庁間近の市役所（といっても非常に可愛らしい2階建ての個人住宅のようにしか見えなかったが）に飛び込む。応対してくれた女性に墓地の場所を訪ねると、一度奥に引っ込んでから、大きな地図を持って来てそれを広げ、ああでもないこうでもない、と墓地のなかの墓石の位置まで教えてくれた。暗くなってしまうと、いろんな意味で怖いので、お礼の言葉を述べてから、早速墓地へと向かう。といっても、市役所のある町の中央広場から5分もかからない場所にその墓地はあるのだったが。

もしかしたら施錠なんて全くしないのかもしれないが、墓地の扉はまだ開いていて、セヴラックの墓前にて、手を合わせた。作法なんて全く判らなかったけれど、祈る気持ちに変わりはあるまい。

その夜はサン＝フェリクス・ロラゲに泊まり、翌朝、観光案内所を訪れた。受付の女性に、「ここってセヴラックの生家があるんですね」などと色々訊いていると、

その女性が「だったら、直接カトリヌに訊いてみたら？ 今電話してみてもあげるから」と、マダム・カトリヌ・ブラック・ベレールに連絡を取ってくれた。しかもすぐにこっちに来てくれる、という。言葉通り、程なくして現れたマダムに、館の内部を見せてもらえるよう頼んでみたところ、快く承知していただけた。

かつてセヴラックが起居したその館は、往時の雰囲気そのまま、由緒ありげな家具調度品、あまたの蔵書とたくさんの絵があり、セヴラックが弾いていたというスタインウェイ製のアップライトピアノもあった。触っても構わないとの許可をいただいて、ピアノを弾かせてもらった。拙い演奏を、マダムは熱心に聴いてくれた。その他にもマダムから色々なお話を聞くことができ、サン＝フェリクス・ロラゲというこの土地と、セヴラックの音楽にも少しだけ近付くことが出来たような気がした。

さて、それ以来すっかり気に入ってしまって、現在にいたるまでほぼ毎夏サン＝フェリクス・ロラゲを訪れている。2013年には念願であったセヴラック音楽祭を聴くことができ、今年は10年ぶりにマダムに会うことが叶って、再び館の中を見せていただいて、お話を聴くことができた。

そのほか色々、10年間に渡るサン＝フェリクス・ロラゲ詣での中でたくさんの出会いがあったわけなのだけれども、それらは、もしまた機会があれば、お聞きいただきたいと思う次第なのであります。

日本セヴラック協会創立 10 周年特別演奏会の報告

鎌田和夫

日本の四季の感覚がおかしくなったのだろうか。この夏も局地的な豪雨による土砂崩れや御嶽山の水蒸気爆発で大勢の死者を出しました。それまでの夏の出来事といえば海か川か山での数名の死者くらいであったかと思います。3・11の自然災害と原発事故を目の当たりにしたような気がして、ひどく憂鬱な夏を過ごすことになりました。そんな思いをよそに、原子力発電所の再稼働をぶち上げる政府の節操のなさはどうしたことでしょうか。集団的自衛権も閣議決定され、武器輸出も解禁となり、限りなく戦争への道に突き進むような気がして仕方ありません。

そんなニュースが起こる前の5月25日にセヴラックの例会が行われました。日本セヴラック協会創立10周年を記念しての祭典となり、末吉保雄先生の編曲、構成、芸術監督によるセヴラックのオペラ《風車の心》の全曲演奏が行われたのです。その見事な演出に圧倒されました。それまで例会のたびごとに演奏されていましたが、全曲を通して演奏されるのは初めてのことです。まるで別のオペラを聴いているような、素敵な舞台に変身していました。いきいきと、すっかり生まれ変わっていたのです。大成功でありました。

今回は荻窪から渋谷の文化総合センター大和田の伝承ホールでの公演でした。歌手陣は鎌田直純さん、森朱美さん、森田学さん、小阪亜矢子さん、根岸一郎さん、本宮廉子さん、フクロウ役の柴田暦さん、村人役がセヴラック協会会員の有志の皆さん。演奏者は舘野泉さん、末吉保雄先生、久保春代さん、平原あゆみさん、木村麻衣子さん、石川絵津子さん、曾田瑞樹さん。セヴラック協会の会員が総動員といった感がありました。私は二度目の心臓の手術を3月末に行ったため裏方で、ちょっとお手伝い。

《風車の心》の開演前に、まず舘野さんの挨拶がありました。

「私が2002年に脳溢血で倒れる前年にセヴラックのピアノ曲全集の録音をいたしました。そのCDをもってセヴラックの子孫のベレール夫人とセヴラック音楽祭芸術監督のクバイネさんをお訪ねしたのが、脳溢血で倒れる数日前だったのです。その時、ベレール夫人に日本セヴラック協会名誉会長になってもらいました。それから私は左手で演奏活動することになるのですが、協会が設立されて10年が経ちました。それを記念し、オペラ《風車の心》が演奏されます。末吉君の力で全曲が演奏されることになりました。その喜びを味わえることの幸せを感じています」。

続いて来日中のクバイネさんが講演をされました（通訳は末吉先生）

「オペラが初演されたのは1909年。その後、12回の公演が行われました。18世紀末のサン＝フェリックス・ロラゲが舞台。《ベレアスとメリザンド》が元となり、愛が壊れてしまう話です。二幕もののオペラで演奏時間も短く、世界のどこにでもあるような話で、忘れられてしまったようです。それを今、日本人の手によって演奏されるという試みに感動します」。

この後、水月恵美子さんのピアノ伴奏により、クバイネさんがセヴラックの歌曲《夢》と《梟》を披露。バリトンの洪く、甘い歌声がホールに響き渡り、陶醉の一時でありました。

そして《風車の心》の幕開け。ピアノとフルートの音が哀しき調べを奏でていました。村人たちの元気な行進。風車や村の風景の写真に字幕を担当された末永理恵子さんの努力が輝いていました。

全編を通しての《風車の心》の説明は省きますが、以下、私の詩から少しでもイメージがとらえられたらと記しました。

風車の心

鎌田和夫

ゆるやかな丘
いくえにも
つらなり続く
畑なかに
かがやき光る
ひまわりの
こがねの波の
うねりゆく
ひろがる海の
静寂の
秋の気配を
つつみこむ
ピレネーの山

たわわに実る
ぶどう棚
収穫祭を
祝いつつ
酔いしれ踊る
農夫らは
まわる風車に
ゆれながら
肌にしみる
鐘の音の
哀しみはこぶ
残照の
あかり淋しく

歌えや歌え
心ゆくまで
呑めや呑め
心のままに

深まる秋の
赤き血の
たぎる喜び
たましいの
光りまたたき
燃え盛り
沈まぬ闇に
もだえゆく
ジャックとマリー
再会の
ゆるがぬ契り
かわす愛
あつき心に

心むなしく
 騒ぐ血の
 暗闇てらす
 月あかり
 沈まぬ心
 いかにせん
 重くしみゆく
 苦しみの
 丘の砂漠を
 あてどなく
 さまよい歩む
 影ひとつ
 フクロウの揺れ

踊れや踊れ
 心ゆくまで
 呑めや呑め
 心のままに

思い出を
 心の奥へ
 しまいこみ
 かすかな光り
 身にまとい
 ひとり静かに
 もどかしく
 気づかれぬよう
 ひっそりと
 去らねばならぬ
 マリーとの
 あつき抱擁
 胸にしめ

騒げや騒げ
 心ゆくまで
 呑めや呑め
 風車の心

編集後記

2009 年

セヴラック通信 第 17 号 2014 後期 日本セヴラック協会 会報

2014 年 11 月 9 日発行

発 行： 日本セヴラック協会

<http://www.geocities.jp/severacjp/index.html>

E-Mail: severac.japon@gmail.com

名誉会長◎カトリース・ブラック・ベレール

顧問◎館野泉、濱田滋郎、末吉保雄、小沼純一

事務局◎伊東美香、亀田正俊、窪田葉子、松田純子

事務局： 松田純子◎〒 247-0013 横浜市栄区上郷町 262-32-5-204 TEL & FAX: 045-895-2317

連絡先： 亀田正俊◎ TEL&FAX: 042-502-7227 / E-Mail: kameyan@jcom.home.ne.jp

印刷・製本： フェデックス・キンコース・ジャパン



日本セヴラック協会

Société Déodat de Séverac -Japon